

研究推進校事業報告書

<取組と成果のポイント>

○教職員の道徳の時間における指導力の養成

- ・学年を中心に資料選定会や指導案検討会を開き、資料と発問の在り方について何度も吟味した。また、授業力養成講座を開催し、よりよい発問の吟味、具体的なコーディネート方法の検討、オーシャンビューエンドの具体策の検討などを行った。さらに、先行授業、出前授業を積極的に実施したり、外部講師の指導を受けたりすることで、教職員の指導力を高めることができた。自信をもって道徳の時間に臨む姿が教職員に見られるようになった。

○生徒の「聴く力」の育成

- ・道徳の時間に、コの字隊形、相互指名などを取り入れ、板書を工夫することで、対話の活性化を図ることができた。また、帰りの放送で実施している「今日のお話」と黙想タイム後の展開を工夫することで、相手の話を目と耳で聞いたり、相手の話を聞いて自分の意見を述べたりするなど、生徒の「聴く力」がずいぶん育ってきた。

○生徒に道徳的実践の場を与え、自己有用感を高めるための取組

- ・町内会や社会福祉協議会などから依頼があったボランティア活動を、全校に紹介したり、この活動に参加させたいと思う生徒に学級担任から声を掛けて参加を促したりした。そのおかげで、ボランティア活動に参加しようとする生徒が増えた。参加した生徒は自己有用感や達成感を味わうことができた。

1 研究推進校の概要

学校名	所在地	電話番号	生徒数	備考
安城市立安城南中学校	安城市城南町2丁目7番地2	0566(75)3531	893人	

2 研究課題

(1) 教職員の道徳の時間における指導力の養成

- ・資料の取り扱いや発問の仕方の工夫（生徒を捉える）
- ・授業におけるコーディネート支援の在り方（自己や他者のよさに気付かせる）
- ・振り返りの視点の明確化（自己や他者のよさに気付かせる・よさを伸ばす）

(2) 生徒の「聴く力」の育成

- ・三つの対話（対象、他者、自己）の充実（自己や他者のよさに気付かせる）
- ・「今日のお話」と黙想タイム（帰りの会に全校放送で実施）の充実（よさを伸ばす）

(3) 生徒に道徳的実践の場を与え、自己有用感を高めるための取組

- ・地域にはたらきかける活動の開発と推奨（よさを伸ばす）

3 研究主題とその設定理由

(1) 研究主題

「耳をすまして、学びを拓（ひら）く」
～道徳の時間における指導改善を中心に～

(2) 主題設定の理由

本校では、平成25年度まで、「仲間とともに、学びを深める生徒の育成」を主題として、教科指導における「学び合い」に焦点を当てた研究を行ってきた。

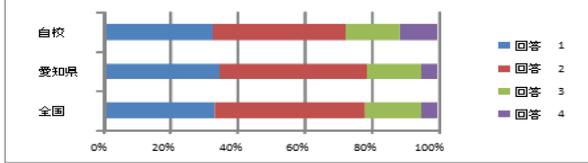
ところが、全国学力・学習状況調査の質問紙に関する結果（2項目・平成25年度・26年度）を見てみると、研究の成果が十分に得られていないことが明確になった。

本校の授業の課題を明らかにする

H25

普段の授業では、自分の考えを公表する機会が与えられていると思いますか

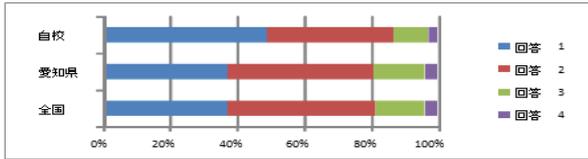
	回答1	回答2	回答3	回答4
本校	32.9%	39.5%	16.1%	11.2%
愛知県	34.6%	43.8%	16.3%	5.1%
全国	33.4%	44.6%	16.6%	5.1%



H26

授業では、自分の考えを公表する機会が与えられていたと思いますか

	回答1	回答2	回答3	回答4
本校	48.4%	37.0%	10.0%	3.2%
愛知県	37.3%	43.3%	15.0%	4.2%
全国	36.9%	44.2%	14.6%	4.0%

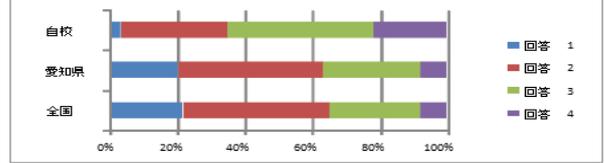


回答1 = 当てはまる 回答2 = どちらかといえば、当てはまる
回答3 = どちらかといえば、当てはまらない 回答4 = 当てはまらない

H25

普段の授業では、生徒の間で話し合う活動をよく行っていると思いますか

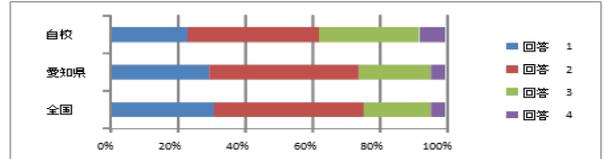
	回答1	回答2	回答3	回答4
本校	3.1%	31.6%	42.7%	22.0%
愛知県	20.3%	42.5%	29.1%	8.0%
全国	21.7%	43.0%	27.4%	7.7%



H26

授業では、生徒の間で話し合う活動をよく行っていたと思いますか

	回答1	回答2	回答3	回答4
本校	23.1%	38.4%	29.2%	7.6%
愛知県	29.6%	44.3%	21.3%	4.6%
全国	31.3%	44.0%	19.9%	4.6%



この1年間で、二つの質問項目の結果に大きな改善が見られた。しかし、授業で「自分の考えを公表する機会」については、多く与えられていると感じるようになったものの、まだまだ「自分たちで話し合う機会」は与えられていないと感じていることが分かった。

特に、平成25年度のデータは、教師集団に大きな衝撃を与えた。長きにわたって、授業の中に「聞き合いタイム」を位置付け、研究を推進してきたにもかかわらず、このような結果になってしまったのはなぜだろうか。真摯に省みる機会となった。そして、「聞き合いタイム」と名付けながらも、結局、その時間が、生徒対教師の呼応に終わってしまっていたからであろうと結論付けた。そこで、生徒一人一人が教材や資料との誠実な自己内対話をした上で、話し合いの場面において、自分の考えを積極的に伝えるとともに、他者の考えに誠実に耳を傾けることができるようにしたいという願いをもった。

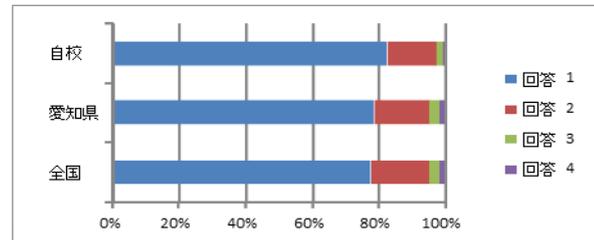
一方で、全国学力・学習状況調査の質問紙調査の結果(4項目・平成26年度)から、「本校生徒の道徳的実践に対する意欲や判断力」の特徴を捉えてみた。

本校生徒の道徳的実践に対する意欲や判断力をとらえる

H26

人の気持ちが分かる人間になりたいと思いますか

	回答1	回答2	回答3	回答4
本校	81.9%	14.6%	1.8%	0.7%
愛知県	78.6%	16.7%	2.9%	1.7%
全国	77.8%	17.5%	3.0%	1.6%

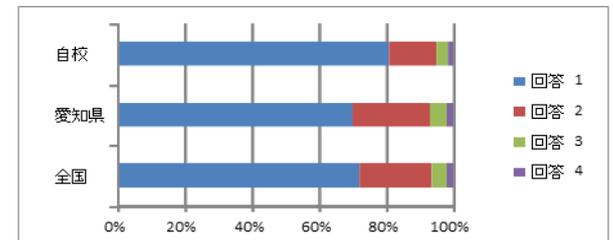


回答1 = 当てはまる 回答2 = どちらかといえば、当てはまる
回答3 = どちらかといえば、当てはまらない 回答4 = 当てはまらない

H26

いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか

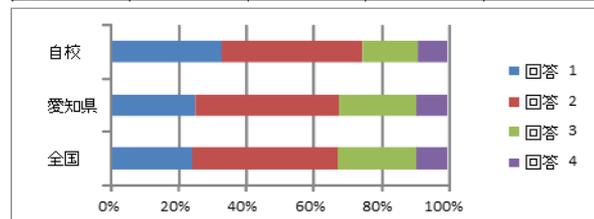
	回答1	回答2	回答3	回答4
本校	80.1%	13.9%	3.6%	1.4%
愛知県	70.2%	22.6%	5.1%	2.0%
全国	72.1%	21.3%	4.6%	1.9%



H26

自分には、よいところがあると思いますか

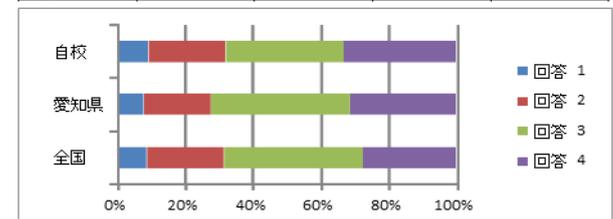
	回答1	回答2	回答3	回答4
本校	32.4%	41.6%	16.0%	8.9%
愛知県	25.1%	42.7%	22.8%	9.2%
全国	24.3%	42.8%	23.3%	9.4%



H26

地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか

	回答1	回答2	回答3	回答4
本校	8.9%	22.8%	34.2%	33.1%
愛知県	7.5%	20.2%	40.9%	31.4%
全国	8.5%	22.7%	41.3%	27.4%



前頁のデータから、他者理解への意欲、自己有用感をもち、またそれを生かそうという意欲、あるいは、いじめを許さないとする規範意識等、非常に高い数値で、健全な道徳性を身に付けている生徒が多いことが分かる。

一方、課題となるのは、地域社会に対する貢献意識である。特に、回答4（当てはまらない）の比率がきわめて高い。このことは、文部科学省による「道徳教育の抜本的改善・充実に係る支援事業研究推進校」として本年6月に実施した「道徳に関するアンケート」においても、同様の結果であった。「地域の行事に積極的に参加していますか」との問いに、1/4の生徒が「そう思わない」（回答4に相当）、1/2以上の生徒が、「そう思わない」（回答4に相当）または「あまりそう思わない」（回答3に相当）としている。生徒にとって、地域社会は家庭や学校とともに大切な生活の場である。地域社会の実態を把握させたり、認識を深めさせたりして、地域社会に生きる一員としての自覚を高めさせる指導が必要である。

こうした分析を基に、目指す生徒像及び目指す教師像を、次の「研究の概要」に示したように設定し、道徳の時間の指導改善を中心とした研究に着手することにした。

4 研究の概要と特色

(1) 目指す生徒像

- ・「耳をすまし」て、事象と対じし、誠実に自己内対話する生徒
- ・自分の考え方や感じ方をもとに、積極的に話合いに参画し、「耳をすまし」て、他者の考え方や感じ方を受け止めようとする生徒
- ・話合いを通して、再度自己の考えや思いに「耳をすまし」て、それを深めることのできる生徒
- ・自ら実践の場を求め、身近な他者や地域にはたらきかけることのできる生徒

(2) 目指す教師像

- ・生徒の言動及びその背景にあるものについて、常に誠実に「耳をすまし」て、生徒理解を進める教師
- ・生徒と共に考え、悩みながら、常に自己成長を果たそうとする教師
- ・生徒のために、資料や教材の開発あるいはよりよい授業づくりにまい進する教師
- ・授業における生徒同士の思いや考えをつなげ、深め、拓（ひら）くためのコーディネートを身に付けた教師

(3) 研究仮説と手だて

【仮説1】

生徒の実態把握を丁寧に進めた上で、明確な願いをもち、その願いを実現するための魅力的な資料開発に努めれば、生徒は「耳をすまし」て資料と対じし、誠実にまた意欲的に価値理解を進めるであろう。

→【仮説1】に対する手だて

- ・日常における生徒の道徳性の把握
- ・各指導時間における抽出生徒の設定

【仮説2】

誠実な自己内対話を引き出す発問を吟味するとともに、話合いの場面において、生徒同士の思いや考えをつなげ、深めるための的確なコーディネートを行っていけば、生徒は、互いに「耳をすまし」つつ、自らの思いや考えを積極的にひれきし合い、多様な価値理解と出会って、葛藤を深めるであろう。

→【仮説2】に対する手だて

- ・誠実な自己内対話のもとで、多様な考えを生み出しねらいに迫る発問の吟味
- ・コーディネートの方法をい五つに分類し、指導の際に意識化（下記参照）
- ・対話の活性化を図るための取組

コーディネート支援の五つの類型化

A: 任せる・見守る

- ・予想された対話が進んでいるとき、教師は話を生徒に任せ、見守ることで、生徒主体の話合いを展開する。

B: 認める・評価する・生かす

- ・少数派の意見を認め、生かすことで、対話を活発にする。 (次頁に続く)

- ・抽出生徒を意図的に指名し、その意見を認め、評価する。
 - ・本時の中で活躍させたい生徒を生かすことで、対話に積極的に参加させる。
- C:気付かせる・焦点化する・提案する**
- ・対話の中で出た意見が、分類できることに気付かせ、自分の考えとの比較や、考えの見直しにつなげる。
 - ・特定の意見を取り上げて焦点化し、話合いを深めさせる。
 - ・生徒の発言の中から対話の焦点化が仕組めないときは、教師が提案し、話合いを進展させる。
- D:軌道修正する・断ち切る**
- ・対話の内容が発問からずれた場合は、断ち切り、軌道修正することで、本時のねらいに迫る対話を進める。
- E:ゆさぶる・切り返す・さぐりを入れる**
- ・対立する考えをもつ生徒を意図的に指名して思考を揺さぶり、対話を深める。
 - ・本時のねらいにつながる発言に対して、補助発問などで切り返し、対話を深める。
 - ・対話を深める際、鍵となる発言をしそうな生徒を指名して考えを探り、対話点を仕組む。

【仮説3】
 振り返りの仕方や授業の終末を工夫することによって、生徒は学びの深まりを自覚するとともに、学び合えたことに感謝の念を抱き、また次なる学びへの意欲を高めるであろう。

→【仮説3】に対する手だて

- ・振り返りの視点の明確化
 - ・オーシャンビューエンドを意識した終末の工夫
- (例)
- ・生徒の振り返りを紹介
 - ・教師の説話
 - ・詩や名言、格言等の紹介
 - ・資料の後日談の語り
 - ・授業で活躍した生徒や変容の大きい生徒の紹介
 - ・普通の生徒の言動を紹介
 - ・映像や音楽の視聴
 - ・地域や関係者の声の紹介
 - ・黙想させて感動資料の範読
 - など



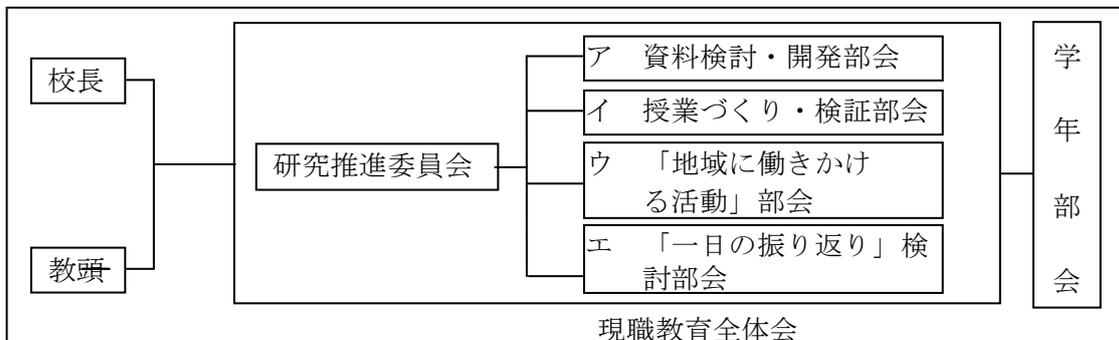
【仮説4】
 帰りのSTの「今日のお話」と黙想タイムを充実させたり、身に付けた道徳的実践意欲・態度を発揮する場を紹介したりすれば、生徒は常に「耳をすまし」て事象を捉えたり、自らの意思で道徳的実践の場を求めて動き出したりするであろう。

→【仮説4】に対する手だて

- ・生徒の心を揺さぶったり、問題意識を高めたりするための「今日のお話」の展開の工夫
- ・担任による、黙想タイムの視点の明確化やその後の展開の工夫
- ・活躍の場を提示し、個別に働きかける教師支援

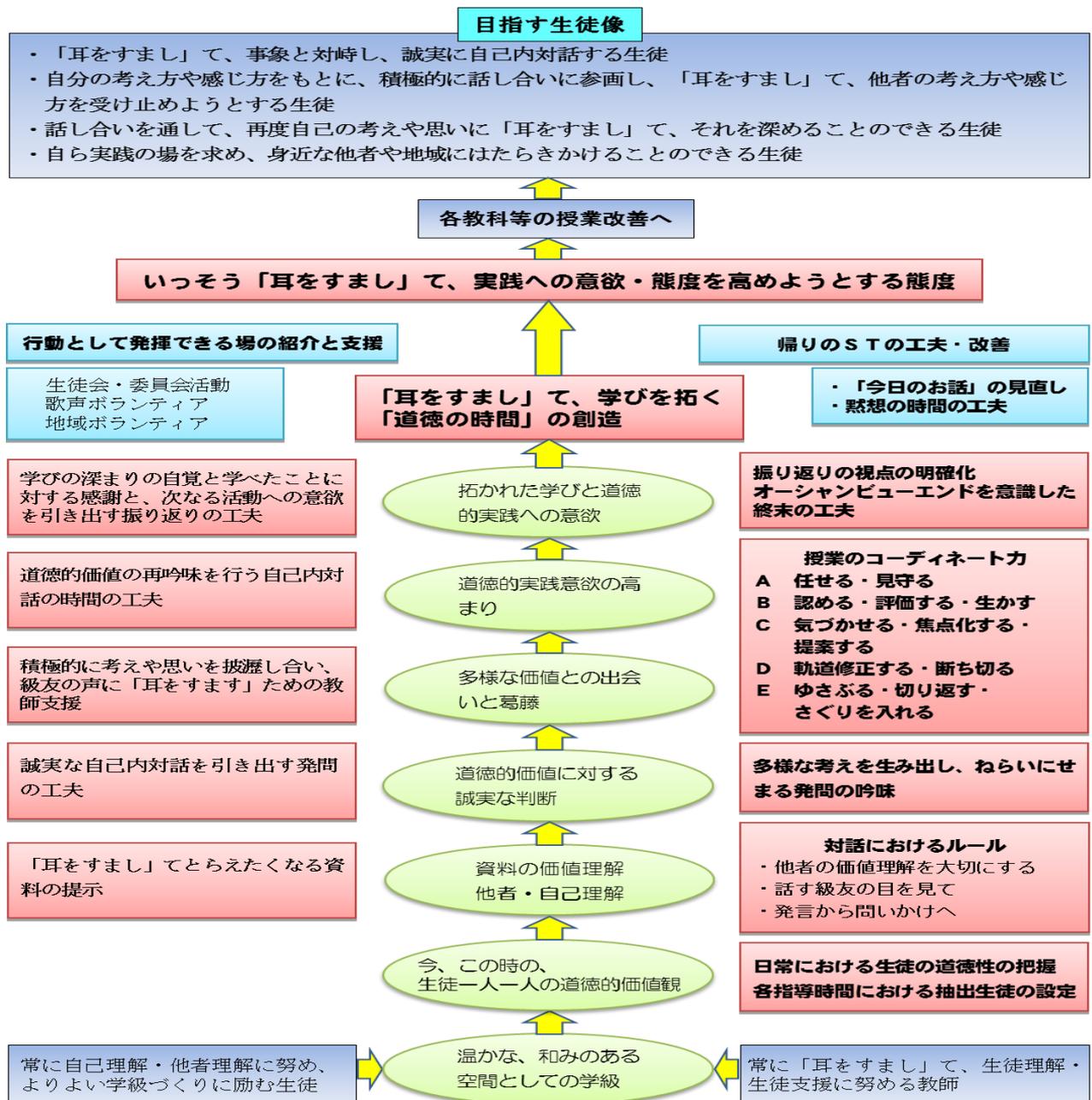


(4) 研究組織



(5) 全体構想

※次頁に掲載



(6) 研究課題に関わる取組

①教職員の道徳の時間における指導力の養成

- ・多彩な資料収集と学年協働による資料選定会の開催
- ・模造紙と付箋を利用した指導案検討会の開催
- ・授業力養成講座の開催
 - よりよい発問の吟味
 - 具体的なコーディネート方法の検討
 - オーシャンビューエンドの具体策の検討
 - 模擬授業（校長、外部講師、研究主任など）
- ・先行授業、出前授業の積極的な実施

《取組1》授業研究会、講師と語る会

5月の授業参観の際に、愛知淑徳大学講師の柴田八重子先生と京都市立音羽中学校教頭の鈴木克治先生をお招きした。午前中に「講師と語る会」を行い、事前に講師に送付しておいた指導案をもとに、授業者と数名の教師が道徳の授業について、直接、講師の先生から具体的な御指導をいただいた。授業参観では、柴田先



生に2年2組、鈴木先生に3年8組を保護者と共に参観いただいた。(1年生は本校校長が参観)生徒下校後、「授業研究会」を学年ごとに実施し、発問がねらいに迫るものであったか、コーディネート支援が適切であったかなどについて話し合った。そして、最後に講師の先生から道徳の授業の心構えや進め方などについて御指導をいただいた。本校職員にとっては、自分の授業の進め方を見直すよい機会となり、ねらいに迫るためには発問が大切であることを再認識することができた。

《取組2》研究授業(全体授業、先行授業、出前授業)

5月下旬に全体授業を、職員数が多いため、3年生の2学級で行った。授業後の協議会では、発問については一定の評価があったものの、生徒の意見をつなげ、広げることにってはたくさんの意見が出された。生徒の意見をいかに整理して板書するか、出された意見を他の生徒にいかに広げるか、そのためにはどんな準備が必要かなど多くの課題が残った。そして、実践を積み重ねていながら、コーディネートの仕方を学んでいくしかないという結論に至った。そこで、今後は学年内で先行授業や出前授業にたくさん取り組んでいくことになった。そして、各学年の研究推進委員が中心となって先行授業や出前授業の計画を立て、互いに授業を見合いながら、発問を何度も吟味したり、コーディネートの方法を考え直したりしていった。「3回目ぐらいになると自分の納得できる授業ができる」と指導されたことがあるという研究主任の話もあり、先行授業や出前授業に、本校職員は積極的に取り組んでいた。



《取組3》模擬授業、示範授業

8月に、明るい人生に掲載されている「星への手紙」(生命の尊さ)という資料を使って、愛知淑徳大学講師の柴田八重子先生に模擬授業を行っていただいた。全員を立たせ、同じ意見の人は座っていくという手法をはじめ、生徒役の職員から意見を見事に引き出していく柴田先生の授業の進め方は大いに参考になった。

9月下旬に、2年4組で柴田八重子先生に示範授業を行っていただいた。8月に模擬授業で行ったことを、生徒を相手に再現していただけたというものであった。模擬授業のときと同じように授業が展開されていった。なかなか授業で意見を言わないという学級であったが、柴田先生にうまく触発され、積極的に意見を言う姿、本音を語る姿などが見られた。柴田先生の切り返しのうまさが出ている授業、生徒のよさをうまく引き出している授業になっていた。なかなか真似をすることはできないが、どのような言葉を掛ければよいか、どのように授業を進めるとよいか、本校の職員にとって大きなヒントをいただいた。



《取組4》模造紙と付箋を利用した指導案検討会

学年で中心発問について何度も吟味し、生徒の予想される反応を付箋に書き込み、それらを模造紙に貼り付けながら、指導案の検討を行った。中心発問をみんなで吟味することで、よりよいものができるとともに、中心発問の設定の仕方がだんだんと身に付いてきた。また、生徒の反応についてもいろいろな考えが出てくるので、生徒の捉え方を学ぶ上で大変有効であった。

《取組5》授業力養成講座

授業後に、月に数回、授業力養成講座を開催した。本校校長が講師となり、授業の進め方、発問の作り方、板書の仕方、指導案の書き方など、毎回テーマを決めて講座が行われた。ほかに模擬授業を行ったり、分科会の進め方のレクチャーを行ったりした。若手にとっては、ベテランの教師から学ぶ貴重な機会となった。



②生徒の「聴く力」の育成

- ・道徳の時間を含めた授業でのルールづくりと徹底

- ・コの字隊形、相互指名、板書の工夫などによる対話の活性化
- ・「今日のお話」の内容の吟味
- ・「今日のお話」と黙想タイム後の展開の工夫

《取組1》授業公開（授業参観）、講師と語る会、授業研究会

5月9日（土）5限に全学級が道徳の授業を保護者や地域の方に公開した。下はその時の保護者の感想の一部である。

- ・他の人の意見をきちんと聞くことができていました。落ち着いた雰囲気の中で授業が受けられているのでいいと思います。
- ・道徳の授業に対して静かに一人一人考えることができているように見えました。こういった心の授業を通して、日々の生活の中で自分自身を見直し、そして、人に対して思いやりのある行動がとれる子どもたちへとすることを願っています。

上のように、落ち着いて授業に取り組んでいる様子や、他の人の意見をしっかり聞いている姿、積極的に発言する姿を見ていただくことができた。

《取組2》研究発表会

本校は平成26年度・27年度安城市教育委員会の委嘱も受けており、11月10日（火）に研究発表会を行った。特別支援学級を含めた全学級が授業公開をし、全学級で分科会を開催した。事前に、参観者に指導案や研究紀要等を配付し、参観する学級も指定させていただいた。次は、参観者に書いていただいたアンケートの一部である。

- ・学級全体として他人の意見を尊重する雰囲気があり、授業の土台としての学級づくりを見せていただいた。
- ・「今日のお話」にはとても驚いた。子どもたちは当たり前のように耳をすまして聞いていたのを見て、日々の積み重ねが徹底されていることを感じた。
- ・生徒の「聴く」姿勢がきちんと身に付いてきていた。発表する生徒も安心して発表できる雰囲気がとてもすばらしかった。

研究発表会は通過点ではあるが、参観者のアンケートから、本校の生徒が「耳をすまし」て話を聞いている姿、他者の意見を尊重している姿が表出したことが分かる。「耳をすます」という主題を掲げて研究してきた一つの成果が出たと考える。

- ・今日はたくさん挙手することができました。AさんやBさんの意見を聞いて、その人のことを大切に思っていることが大事だということが分かりました。
- ・友達の意見を聞いて、⑨と⑩がいいなと気持ちが変わりました。CくんやDさんと似た経験をしていたので同感しました。また、Eさんの言った「本当の自分を出すことが今できている」という意見から、自分をもっと大事にして、意見を言えるようになりたいです。

上記は、授業後の生徒の「振り返り」である。級友のよさに影響を受け、自分の考えを見つめ直したり（自己内対話）、考えや思いを深めたりしている様子が分かる。教師のコーディネート支援や振り返りの視点の明確化などの手だてが有効であったと言える。

また、参観者のアンケートには、次のような記述も見られた。

- ・発問がしっかり考えられており、子どもたちの活発な意見交換がされていたと思う。普段から道徳の授業がしっかり行われているので、生徒の話合いが活発なのだと感じた。
- ・授業を通して、教師の落ち着いた態度、肩の力の抜けた姿勢が、生徒にも落ち着きをもたらしていたように感じた。
- ・切り返しについて授業者から反省が出たが、すべて100点の切り返しは難しい。が、さらによくしていこうとする授業者の姿勢はすごい。今日の授業において、日頃から積み重ねている教師のコーディネート、板書、十分に表れていました。

多くの参観者から、本校の研究の方向性について一定の評価をいただいた。また、全学級が授業公開をしたが、この取組によって、若手もベテランも道徳の授業について、ある一定以上のレベルまで授業力を身に付けることができたのではないかと考える。これは研究に真摯に取り組み、生徒のよさを生かそう、生徒のよさを引きだそう、生徒のよさを伸ばそうと、日頃から道徳の授業実践を積み重ねてきた成果と言える。また、生徒だけでなく、教師にも「耳をすまし」て生徒の思いや考えを聞き取ろうとする力が身に付いてきたと考える。それは、参観者のアンケートにもあるように、生徒の意見を受け止める姿、切り返しをする姿に表れている。

③生徒に道徳的実践の場を与え、自己有用感を高めるための取組

- ・町内会や社会福祉協議会などへの「地域に働きかける活動」の紹介依頼
- ・学級担任から生徒個々への「地域に働きかける活動」の紹介と勧奨

《取組1》ボランティア活動

町内会や社会福祉協議会などからボランティアの依頼があった活動については、学級で紹介したり、学級担任が個々に声をかけたりして参加を促した。より多くの生徒が参加し、「やってよかった。」「人の役に立ててよかった。」「またやってみたい。」などの感想をもち、自己有用感や達成感を味わうことができた。

5 研究の評価

(1) 研究の成果

<生徒の姿から>

- ・生徒の多様な考えを引き出す発問の工夫をすることで、生徒の思考が深まり、学び合いを十分に成立させることができた。
- ・生徒から「机をコの字にするので、誰が発表しているか分かりやすい。相互指名がしやすい。」「道徳の授業でいろいろな人の意見を聞くことができるのは楽しい。」などといった声が聞こえるようになった。
- ・対話のルールを意識して話合いに参加したことで、周りの人の考えや思いを「耳をすまし」て聞こう、知ろうとする姿勢が育ってきた。
- ・教科の授業では挙手のできない生徒が、道徳の時間には発言するようになった。また、発問に対して「分からない」という答えをする生徒が多かったが、自分なりの言葉で考えを伝えることができるようになってきた。
- ・授業が終わった後に、生徒相互でその授業で取り扱った資料や学習内容について、話す姿が見られるようになり、意識の高まりを感じた。
- ・生徒の「振り返り」に、道徳の時間の授業で学んだことを、自分の生活に生かしていこうとする記述が多く見られるようになった。
- ・ボランティアの参加者を募集すると、パンフレットが欲しいという生徒が増えたり、ボランティアに参加したりする生徒が増えた。また、ボランティアを終えた後に感想を聞くと、「楽しかった」や「充実していた」などと体験を前向きに捉える生徒が多かった。

<教師の姿から>

- ・指導案にコーディネート支援を具体的に記述し、意識して授業を行った。それが具現化できたり、できなかったりと、毎回満足する授業ができたわけではないが、意識して授業を行うことで、生徒の意見を分類したり、分析したりすることができ、補助発問や生徒の発言への切り返しスムーズにできることが増えた。
- ・先行授業、出前授業に積極的に取り組むなど、道徳に対する取組が前向きになった。先行授業を繰り返し行うことで、生徒の思考が予想でき、臨機応変に支援や対応ができるようになってきた。
- ・「対象との対話」や「自己内対話」を深めるために、資料の範読に代えて、紙芝居を用いたり、話合いの中で動作化を取り入れたりするなど、生徒の実態に合わせた支援をしようという意欲が高まった。
- ・より生徒の「心に響く」資料がないか、生徒の実態に近いものはないかと資料開発に取り組む教師が増えてきた。
- ・研究を進めるに当たって、学年部会、授業づくり部会などで真剣に協議する姿があった。時間を忘れて前向きに討論し合う姿も見られるようになり、授業改善の意識が高まった。

(2) 今後の課題と取組

- ・コーディネート支援を事前に考えてあるが、生徒の反応は想定外になることも多かった。事前の教材研究を一層緻密に行うとともに、臨機応変に対処する力を身に付けていかなければならない。
- ・生徒の意見を、構造的に分かりやすく板書することがなかなかできなかった。生徒の思考を整理する板書の在り方を更に研究していく必要がある。
- ・「特別の教科 道徳」の実施に向けて、問題解決的な学習の在り方やテーマ発問を主とした授業の在り方等、多彩な指導法について研究を深めていく必要がある。
- ・評価の在り方について、先進校の実践から学び、次の指導に生かすようにしなければならない。

- ・ 道徳の時間での学び合いをどのように深めさせるかについて研究してきたが、これらの成果を教科の授業でどのように生かしていくかが課題であり、教科の授業での研究を進めていく必要がある。